



©2015 川端康成記念會／古都プロジェクト

映画批評

『古都』 ～ 世代を超えて継ぐ伝統、母から娘に ～

塚田三千代（翻訳家・映画アナリスト）

本映画は川端康成の小説『古都』を原作とする3度目の映画化。原作に基づきながらも映画で描かれる世代は、双子姉妹の千重子と苗子が時を経て互いに娘の親になった20年後に置き換えられてある。つまり、原作に描かれた時代ではなく、その次の世代を設定し、人生の岐路に立ち悩む年頃になった舞を娘に持つ千重子、そして結衣を娘に持つ苗子に焦点をあてた映画に仕上げた。川端康成の名作『古都』に描かれた宿命的な双子姉妹の千重子と苗子の決別後の物語を、1200年の歴史を持つ古都の伝統にも今はひしひしと押し寄せる現代化の波のなかで表象しようと試みた映画作品である。

人生の選択に悩む娘心の揺れ動く気配に気づいたとき、母親の千重子と苗子は自分たちが娘と同じ年頃だった頃を思い出す。そして、自分が思い悩んで決断した時の記憶がみずみずしく蘇ってくる。あれから以後、双子姉妹は一度も再会していない。互いに知らない別の人生を歩んできた。しかし今、パリに居る娘と京都の母との絆を、伝統の北山杉をモチーフにした1本の西陣織帯が強くつないでいるのを映画を観る人に気づかせる。その帯は若き日に、千重子が苗子のために手織工に頼んでデザインして織ってもらった帯。20年前に千重子と苗子の絆の証を繋ぐ1本の帯であった。

パリで、舞は母の千重子から譲られたこの所縁の帯をしめて、日仏親善のために日本舞踊を舞う。絵を学ぶ結衣は母の苗子から贈られた帯を見て、故郷の北山杉を背景にした山里を象徴的に昇華させた独自の絵をパリの美術学校で制作する。

京都の伝統を表象するイメージにつながる文化は、茶道、華道、書道、座禅、京都料理、友禅着物、花見、もみじ狩り、京都伝統芸能、祇園祭、時代祭、稚児、武者行列、舞子、呉服店、町屋、屋号を染めた店先の暖簾、弁柄格子戸、手織り職人、平安神宮の桜、嵐山の紅葉、渡月橋、清水坂、鴨川に沿う遊歩道、嵯峨、大原、日本の伝統杉を100年かけて育てる北山杉、等数多い。これは1200年を経てはぐくまれてきた。

しかし現今では、古都の表玄関は、京の町屋を囲む山々の自然を暮らしの中に融和させてきた1200年の歴史と文化の中を、超速で走る新幹線と新ビルに建て替えられて姿を変えてしまった。

伝統の都市パリと京都を対比してみると、セーヌ川と鴨川、教会と禅寺、住む人々の付き合い方の違いがある。映画はその細部をみずみずしく淡白な色調の映像にして表現している。カメラがとらえるショット毎の映像には冷涼な透明感がある。だからこそ古都の美しい四季や雰囲気浮かび上がってくる。

本映画は言わば、川端康成の小説『古都』を原作とした映画というよりはむしろ小説『古都』を原案とする YUKI SAITO 監督・脚色の新しい映画作品だといえよう。ぜひ多くの人たちに鑑賞をおすすめしたい。

(© 2016.9. m.tsukada)



↑ 佐田千重子(老舗の佐田呉服屋をついだ双子姉妹の姉を演じる松雪泰子)



↑ 佐田 舞(千重子の娘を演じる橋本愛)
パリの日仏会館で、日仏親善のために、母 千重子から譲られた北山杉の帯をしめて舞う。



↑ 中田結衣(千重子と双子姉妹 苗子の娘を演じる成海璃子)
パリの美術学校に留学して絵を学んでいる。



↑ 嵯峨に隠居する佐田太吉郎と孫娘の舞



↑ 一人娘の舞をパリに旅立たせた竜助と千重子

【物語】

映画は縦糸に横糸を織う自動織機とその律動音、遠景に新幹線の通過、町屋の屋根、弁柄格子戸へとカメラでパンする、と思いきや突如にパンと亀裂する、千重子がうなされて飛び起きる。夫の竜助が目を覚まして夢を見たかと千重子をいたわる。そして字幕で配役などがロールアップして、つぎに物語が始まる。

今朝もいつものように店の前に水をまき、夫の竜助(井原剛志)に丁寧にお茶を淹れ、仏壇に手を合わせる佐田千重子(松雪泰子)。京都室町に先祖代々続く佐田呉服店を継いで20年、同じ暮らしを守り続けてきた。しかし、周囲は変わりつつあった。西陣を歩いても機の音が聞こえなくなり、古くからの付き合いの職人たちが次々と廃業していく。若き日に杉山杉のデザインで西陣帯を織ってくれた大友武男が、家業を廃業することになったと挨拶に来た。「千重子さんのために織らせてもらった北杉山の帯が最高でした。ほんまにおおきに」と何度も礼を

言って去っていった。今日も不動産屋が店をビルに建て替えることを勧めにきた。

千重子の一人娘で大学生の舞(橋本愛)は、一流商社の二次面接を控えていた。就活がうまくいかない友人たちから「最後は家を継ぐんやろ？」と聞かれて、言葉を濁す舞。本当は何をしたいのか、見つけれないでいるのだ。千恵子には、生き別れになった双子の妹がいた。彼女の名は中田苗子(松雪泰子/二役)、京都のはずれの北山杉の里で夫と林業を営んでいる。一人娘の結衣(成海璃子)は、絵画を勉強するためパリに留学していたが、やはり本当は何を描きたいのかを見失い、悩める日々を送っていた。

竜助と千重子は、舞に広い世界で社会を学ばせた後、店を継いでもらおうと考えていた。そのため、町家売ってマンションにしないかという不動産会社の誘いも断ってきたのだが、経営は思わしくなく、外国人観光客相手の町家ツアーを企画したり、竜助の実家で今は多角経営を進める大問屋を手伝ったりしている。

舞と養母の墓に参り、ふと舞と同じ年の頃の自分を思い出す千重子。実の子供ではない自分を温かく育ててくれた両親が喜ぶことだけを望み、店を継ぐのは当然のことと思っていたが、それだけではない。「この町で育つということは、宿命みたいなもんがある気がしてな」と語る母に、舞は顔を曇らせる。

迷う気持ちを抱えたまま面接を受けた舞は、「この会社で成し遂げたいことはありますか」と聞かれて何も答えられない。それを知った千重子は、昔からの付き合いの商社の重役に贈り物を届け、竜助の父の水木(栗塚旭)に口をきいてもらうよう頼み込む。

内定通知を見て母の根回しに気付き、勝手に辞退する舞。「お母さんが気にしてるのは、この佐田の家の顔やろ」と千重子に言い捨て飛び出した舞は、祖父(奥田瑛二)の家へと駆けこむ。祖父は一言、「無理に継がんでもええんちゃうか」と微笑んでくれる。その頃、千重子は思うように生きればよいと言ってくれた養母の優しさに想いを馳せていた。舞が書道の先生からパリで開く個展への同行を頼まれたと知った竜助は、外に出なければわからないものがあるとからと舞の背中を押す。竜助も若い頃、大問屋を継ぐのがいやでアメリカに留学したのだった。

それから数日後の夜、パリと京都では、母から一人娘に北山杉の模様が織り込まれた西陣帯が手渡された。パリでは、娘を心配した苗子が結衣のもとを訪れ、帯にまつわる千重子の思い出を語っていた。一方、京都では千重子が、パリで日本舞踊を披露する舞に帯を託す。

京都とは違うもう一つの古都パリ。母から娘へと受け継いだもの。娘たちの人生が今、交差し

ようとしていた——。

(2016/9/27 by m.tsukada)

【映画情報】

11月26日京都先行／12月3日全国公開

主演:松雪泰子(千重子と苗子を一人二役)。呉服屋の姉・佐田千重子／北山杉の里で働く妹・中田苗子を演じる。

橋本愛: 千重子の娘・佐田舞

成海璃子: 苗子の娘・中田結衣

蒼れいな 蒼あんな 葉山奨之 栗塚旭 迫田孝也／伊原剛志 奥田瑛二

監督: YUKI SAITO

脚本: 眞武泰徳 / 梶本恵美 / Yuki Saito

原作: 川端康成『古都』(新潮文庫刊)

題字:小林芙蓉 / 製作幹事・配給:DLE 企画/制作:and pictures 特別制作協力:
beachwalkers.

後援:京都府、京都市、一般社団法人 京都経済同友会、京都商工会議所

支援 裏千家今日庵、一般財団法人 池坊華道会

協力:公益財団法人 川端康成記念會、特定非営利活動法人 遊悠舎京すずめ

文部科学省特別選定映画

第8回京都ヒストリカ国際映画祭特別招待作品

【映画史リテラシー】

▼『古都』(2016) 主演:松雪泰子 監督: YUKI SAITO

文部科学省特別選定作品

▼『古都』(1980) 主演:山口百恵(一人二役) 監督:市川崑

▼『古都』(1963) 主演:岩下志麻(一人二役) 監督:中村登

第36回米・アカデミー賞外国語映画賞のノミネート作品

▼監督 YUKI SAITO は、アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ (第88回米・アカデミー賞監督賞を受賞)に『バベル』、他の撮影現場で学んだ若手監督。

▼映画の中の言語: 日本語(京都ことば)、英語、仏語

、

© 2016.9 m.tsukada. All Rights Reserved.

→ [古都 1963年版](#)